

「使える英語」の基盤としての発音指導

大西 博人

はじめに

高校での英語教育については、指導の重点がその時どきで変遷してきたように思います。訳読式の授業から pattern practice へ、さらに communicative approach から pragmatic approach などといったように授業方法の流行が見られました。振り返ると現場の英語教師たちは、その時どきの優勢な方法論に影響を受けてきたといえます。

「使える英語」を目指す英語の授業が求められて以来久しくなります。この目標に向かい各英語教師は、これらの新旧の方法論を取捨選択し、目の生徒たちのレベルを踏まえ、創意工夫による日々の試行錯誤を通して、より効果の上がるものを模索するものでなければならないと思います。

本稿では、使える英語のための原点となるにも関わらず時間不足のためか軽視される傾向にある、発音指導を取り上げます。自分自身の中学校と高校の英語の授業を振り返るとき、特に高校では発音指導を受けたという記憶がありません。高校卒業年に実用英語技能検定が始まったという筆者の世代では、英文法と訳読式が中心であったことを考慮すると当然のことであったと思われます。しかし、現時点においても発音指導に時間が割かれていないように思います。そこで日本語にない英音を取り上げ、発音指導の一案を提案したいと思います。

1. 日本人教師による発音指導の重要性

最近の傾向としては、英語の発音はネイティブ・スピーカーの真似をする必要はなく、母国語の訛りがあってもよい、いや訛りがあるほうがよいというような気配を学校現場では感じます。英語の発音指導は ALT に任せればよいという意見がありますが、それだけでは不十分だと思います。ほとんどのネイティブは、日本語の音韻体系や、英音に対する日本人特有の困難点を熟知していません。ネイティブは、

英語の発音はあまりにも自然で当然のことと考えているので、日本人の英語学習者に効率的な発音指導ができない面があると思います。そこに日本人教師の出番があります。

日本人英語教師は、ネイティブ並みの発音はできませんが、少しでもそれに近づくような努力をし、生徒にもより正確な発音を教える努力をすべきだと考えています。使える英語となるためには、相手に誤解されない、相手に十分わかる発音でなければなりません。例えば、mania という単語を日本語では「マニア」と言いますが、英語では「メイニア」という発音となり、いくら何度も「マニア」を繰り返しても相手に通じません。英語の正確な発音は、使える英語の原点だと言えます。

2. 英音の息 (aspiration) : 「ささやき声で英文を読みましょう、話しましょう」

日本語と英語の音の出し方には違いがあります。私たち日本人は、日本語を話すとき息をあまり出しません。極端に言うとも、息を吸いながらでも話せるような言語です。これに反して、一般に西洋言語は大きく息を出さなければ音が出ません。しかし、生徒たちは日本語の呼吸法で英語を話そうとします。

生徒に有声音を排除した無声音のみの「ささやき読み」をさせます。生徒は、相手に言うことをわからせるためには、極端に息を出さざるを得ないことを体得します。そのとき彼らは、英語の発音は息を出さないと音にならないことを実感するのです。この方法は、英語を話すとき生徒に息を出させる効果的な訓練となりました。

3. 英音 p と f : 「多くの息の量が必要です」

英音で息が勢いよく出ないと音にならない代表的な音が p 音と f 音です。前者が語頭にくる場合には特に息が必要なことを生徒に示すことにしています。

練習に用いる単語は pen, please, stop などの頻度の高いものを用います。一枚の紙の上部両端を持ち、口の前にたらし、それに向かって「プリーズ」と誇張して息を出します。その紙は大きく揺れ、この音を生み出すにはいかに多くの息の量が必要であるかを示すことができます。また please を stop と比較することで、語尾にくる p 音は息の量が少ないことも同時に示すことができます。

一方、f 音は p 音ほど多くの息は必要ではありませんが、生徒にとっては苦手なようです。一般的にこの音は「上の歯で下唇を軽く噛むように」と指導されてきていますが、この「軽く噛む」という指示は生徒にとっては誤解を招く面があると思われます。「下唇の真上を噛もうとせず、下唇のやや裏側に上の歯を軽く当て、その瞬間に歯と唇の間隙から息を擦れるように出します。イメージ的には上の歯と下唇で息を瞬間的に噛み切るようにしましょう」と言ってやると、たいいていの生徒は無理なくこの音を出せるようになりました。

これら両音に関連して英音 b と v も紹介し、「英音 p と f と口の位置は同じですが、有声音であり、必然的に出す息の量は少なくなります」と説明します。さらに時間が許せば両音を含むやさしい単語をペアにして練習させます。無声音と有声音の相違がわかり難い生徒がいる場合があります。そのようなときには、「人差し指をのど首に水平に軽く当て、振動ないしは響きを感じられると有声音、そうでなければ無声音」と指導しています。

4. 息で歌う米ロック歌手：「エルビス・プレスリーの歌：All Shook Up」

英語の発音は横隔膜から腹式呼吸で息を出すようにと生徒に説明しても、彼らにはピンとこないようです。そこで日本人に「ロックの王様」としてよく知られているエルビス・プレスリーを教材に持ち出します。彼は上背があるため肺活量が大きく、歌の息も長いのです。彼はスローテンポの歌から速いリズムの歌までこなし、派手なアクションでもよく知られていて、アメリカでは子供から高齢者まで幅広いファンがいました。プレスリーの歌の中に、代表曲ではないのですが、テンポの速い *All Shook Up* (恋にしびれて) という曲があります。彼は発音するというより「息で歌っている」のです。これは英語

の発音について日本人に大変参考になると思います。英語を話すときには息を出すということを体得させるために、一度は生徒に聞かせたいお勧めの曲です。

5. 英音が出せる口の筋力：「ブルース・リー、森進一、志村けんの顔」

日本人がネイティブの英音に近づくためには、上述の「息の量」に加え、「顔と口の筋肉の緊張」が必要だと思えます。テレビや映画でネイティブの口元を注意深く観察して見ると、個人差はあるのですが、突き出した唇が反り返っているように見えます。口の両端の筋肉は力が入って固定されていて動かず、そこがテコのような動きをして口全体を速く円滑に動かすのを容易にしているようです。彼らの顔と口元の動きを見ているといとも簡単なように見えますが、それを模倣しようとするとき彼らの筋肉がいかに強いかわかります。言い換えると、英語の発音に必要な口元の筋肉は、日本語に必要なものとは異なる、つまり、ネイティブの顔の筋肉と日本人のそれとは強度が異なるということが明白になります。

生徒に口の筋肉を鍛える練習をさせることがあります。まず、有名人を引き合いに出し、顔や口元のイメージを浮かばせます。以前には、ブルース・リー、森進一、志村けんなど有名人を引き合いに出していました。空手の達人ブルース・リーは、悪漢にとどめの一撃を加える瞬間に動物的な叫び声を上げ、相手に対する憎しみと人を殺すことに対する悲しみの混ざり合った表情をします。そのときの彼の顔のけいれんが、ネイティブが英語を話すときの筋肉の緊張に通じるものがあると思うからです。歌手の森進一が独特の声で「おふくろさんよ、おふくろさんー」と歌うとき、唇を突き出し頬のあたりを緊張させる顔のイメージ。コメディアン志村けんがギャグで「アイーン」と口を左右に大きく引きつけるように広げる口元のイメージ。

彼らは旧世代に属す人物ですから、高校生にわかりやすいカレントな有名人を選ぶ必要があります。最近ではトランプ米大統領を持ち出し、テレビニュースで彼の映像を見るとき、彼の口元を注意深く観察するようにとっています。彼が英語を話すとき、声の質はよいとは言えないけれども、丁寧で正確な発声であり、その口元の動きがわかりやすいためです。

有名人を例に引き、英語を話すときの口元のイメージを与えた後、「唇を思い切り丸めましょう。次に歯を軽く合わせたまま、口の両端に力を入れ、その両端を口を開けないで思い切り左右に引っ張るように緊張させましょう。この二つの動きを1分間できるだけ速く繰り返しましょう」と指示します。生徒は必ずといってよいほど10秒もしないうちに口が疲れ、動きがスローになります。

このときほとんどの生徒は、日本語と英語を話すときに用いる口の筋肉の違いを肌身で実感します。ちなみに筆者は一人のとき折「歯を軽く噛み、口を前に突き出し両唇を思い切り丸め、次に口の両側を首の筋が引きつるほど緊張させ左右に引っ張り、一旦その位置で固定してから素早く両唇を丸める動きを繰り返す」という口の筋力トレーニングをしています。

6. 英音 th : 「夏の暑い日に犬がハーハーと舌を出しているのをイメージしましょう」

英音 th は日本語と英語との相違を象徴する音としてよく知られていますが、中学校段階では十分な指導がされていないように思います。高校段階でも時間的な制約のためだろうとは思いますが、指導不足の印象は否めません。

伝統的にこの英音は、「上下の歯の間に舌をはさむ、ないしは舌を軽く噛む」といった指示のもとに指導されていたように思います。舌をはさむないしは軽く噛んだままでは音は出ません。指導としては、「舌の上下と歯の間の僅かな隙間から摩擦するように息が出て初めて音が出る」ことを強調した後、「暑さのために犬が舌を出して苦しそうにハーハーと息をしている様」をイメージさせます。さらに「これは瞬間的に出る音なので、上下の歯と舌の間隙に息が流れる一瞬のタイミングを同時に合致させ、息を噛むというイメージを浮かべましょう」と説明し、実際に誇張して生徒に示すことにしています。

その際、筆者は s 音と th 音を対比させ、両方を含む短い文 Mr. Smith likes to think. を練習に用いています。このように無声音 th を指導した後、有声音 th の指導に移ります。両音は口の位置は同じで、無声音と有声音の違いだけだからです。

7. 英音 r と l : 「どちらも息の続く限り音を出せますよ」

これら二つの英音も英語学習において以前からよく知られていますが、今や常識となっているため中学高校ではあまり指導されていないように思えて仕方ありません。一般に、高校入試や大学入試において発音は出題されることが極めて少ないからでしょう。これらの英音は、日本人にとっては発音するよりは聞き分けることが難しいのですが、まずは正確に音を出すことができれば聞き分けることも困難となります。これら両音のうち、舌の位置をつくる緊張度がゆるい l 音より指導するのが容易だと思えます。生徒にできるだけ長く音を出し続ける指示から始めます。

「大きく口を開けてアーとできるだけ長く、1分間を目指して音を出しましょう。もう一度、同じように音を出しますが、今度は息を出しながら徐々に舌先を上歯の内側の付け根を目指して近づけ、しっかりそこに押し付けましょう。そのままアーと息の続く限り音を出しましょう。息は舌の左右から出て行きます」と説明します。次に、「この英音は単語のどの位置に来てほんの一瞬の音です」と付け加えた後、一般的な単語、例えば live, sleep, feel などの語を用いて練習に移ります。

一方、r 音は日本人にとって多少とも舌に強い緊張を必要とします。一般的に「舌を巻くように」という言い方がされますが、生徒にはもう少し具体的に指示する必要があります。アーと声を出し続けるまでは l 音と同じですが、「声を出し続けると同時に、舌先を口蓋に触れずに上向きにのどの奥に向かって徐々に丸めていき、舌先が歯先より3センチほど奥に入っていると思えるほど丸めましょう。息は舌の上の空間から出て行きます」というように説明するのがわかりやすいと思えます。

この英音は l 音と異なり、語尾にくる場合には一瞬の音ではなく、多少とも長くなる傾向があります。これら二つの英音は、日本語「る」と混同されやすい上に、日本語では使わない舌の位置を要求し舌に緊張を強いるため、意識的な練習による慣れが必要です。これら二つの音を正確に生み出す実感が両者の聞き分けに役立つはずですが。

8. 英音 w : 「ひょっとこのように唇を丸めるだけ丸めましょう」

日本人にとって w の音は厄介なものだと思います。この英音は、wh-疑問詞や、we を始めとする文頭にくる単語や、文中にくる between など多くの身近な単語に含まれています。ネイティブは何の苦勞もなくこの音を出せますが、日本語にないこの音を正確に出すには注意が必要です。

筆者はいつも生徒たちには、「人差し指を歯に当たるところまで入れ、両唇がその指の周りに接する程度まで思い切り唇を緊張させ丸めましょう。ひょっとこの面の口を思い起こしましょう」と指示します。次に「それから指を抜き、その唇の緊張をゆるめないうで、『ウッ』と思い切り息を出しましょう。その一瞬の音が w 音なのです」と説明しています。口と唇に極度の緊張を伴う上に、息を出す瞬間の音であるだけに日本人にとってなかなか難しいものです。上述の英音 l, r とこの w を含む練習には、これら 3 音を含む便利な単語 world をいつも用いています。

9. 発音指導の実践と課題

英語の授業時間数には制約があります。限られた時間において発音指導は、音声学や比較言語学に基づき体系的に行うことは不可能です。しかし、高校段階においてはその必要性も低いと思います。しかし、「使える英語」という視点からすると、日本語と英語とが著しく異なる発音の基礎的な指導は必要はあらずです。

英語の授業でリーディング、英語表現などの科目であっても、英語を扱う限りは英音の指導は可能です。そこで筆者は、どの科目の授業であっても、生徒の英音が明らかに不正確と判断したときに、その生徒自身の問題としないで生徒全体に向け、その英音の簡単な説明と、短時間の発音練習をしてみました。発音指導の利点は、どの科目においても短時間で指導できることです。必ずしも毎時間する必要もなく、その場その場の判断で適宜行えば十分だと思います。

勿論、教師自身が英音の理論を心得ていて、同時に正確な発音ができるように研鑽を積むことは言うまでもありません。かつて、ある同僚の音楽の教師に、「英語が正確に話せない英語教師は、歌が歌え

ない音楽教師みたいなもの」と言われたことを思い出します。

10. 個々の英音の発音から英文としての発音

生徒はすべての英単語を同じ強さで、単語の長さに応じた長さで発音します。これは日本語のリズムを英語に持ち込んでいるためです。そこで、強勢を置く品詞とそうでない品詞を示し、強弱をつけた発音練習をさせる必要があります。まず、一般に強勢を置く品詞と置かない品詞を説明します。生徒たちのレベルを考慮し、適切な例文を提示して練習をさせます。

① 「文のなかで強勢を置く語に下線を引きましょう」

例 : I love to play with cats.

→ I love to play with cats.

② 「例文を読むので、ポーズを置くところをスラッシュで区切りましょう」

生徒は英文を区切ることなく読む傾向があります。教師が例文を読む間に、生徒に強勢を置くところの下線の語を確認させながら、区切りをつけさせます。文の中でごく短い休止を置くことに注意させます。

例 : I love / to play / with cats.

③ 「強勢を置く語を意識し、スラッシュでほんの少しポーズをおいて発音しましょう」

この強勢とポーズに注意しながら文を発音する練習により、生徒は英語のリズムを体感していくようになります。しかし、ポーズを置いて発音するだけでは、その語数に応じて時間的に長くかかる部分と短く終わる部分ができるだけで、日本語のリズムの域を出ません。

④ 「文の中で区切った部分を、長短に関係なく時間的に同じ長さで発音してみましょう」

英語を読み話す場合、生徒だけでなく日本人は、一般的にスラッシュで区切られた部分に多くの単語があればあるほどそれだけ時間をかけるようになります。この日本語の習慣を英語に持ち込まないようにするためには、指先で軽く机をたたき、それに合わせて各部分を発音する練習をさせます。この練習

では「**強勢を置かない語は、弱く速く発音しましょう**」と指示します。時間が許せば、少しずつやや長い文に移ります。

単語に強勢を置いて発音するとき、生徒がその語自体のアクセントを知っていることが前提となります。場合によっては、単語自体の強勢と文強勢と両方の要素に注意を払わせることが重要になります。最初はスローテンポで徐々にスピードを上げていきます。最近の生徒は洋楽の曲になじんでいるためか、このような練習には熱心で上達も早いようです。

英語のリズムで話すことは、話し相手に誤解されることがなく意思を伝えることができるため、「使える英語」という意味では極めて重要な要素だと考えます。このようなリズムの指導では、これを受けている生徒は練習のときにはリズムカルな英語となりますが、他の英語の授業で英文を読ませてみると、日本語のリズムにもどってしまっていることが多いのです。

この指導を生かすためには、各学校での英語科の教師の間で、ある程度「英語のリズムで読み話すように生徒を励ます」といった共通理解をもつ必要があることを痛感しています。生徒は大学受験に必要なと判断したことには、なかなか意欲を示さない傾向があります。このような生徒の姿勢を刺激するために、クラスの中に時折いる英語圏での滞在経験のある生徒などに英文を読ませ、それを一つの教材としてリズムの必要性を力説し、2～3分間の練習を行うことも有効でしょう。

おわりに

英語教育において「使える英語」を求める声が叫ばれて以来、かなりの年月が経過してきました。使える英語という要請は、外国と日本の英語教育を比較し、日本では中学高校で6年間英語を学習しても話す能力が未だに不十分だとする認識より出てきているようです。

英語を話し書く実用的な能力を養うためには、二面的な要素が必要であると思います。一つは、英語教師自身が使える英語の能力を持っている必要があります。大雑把に言うとはぼ英検一級程度が望ましいと考えられます。もう一つは、教師が自分で英語力を身につけてきた過程や苦労を振り返り、生徒に

使える英語を身につけさせるためにはどのような授業をすべきかを絶えず試行錯誤し、実践に移していく努力をすることだと思います。いわゆる「あの手この手」といったタスクを設定し、生徒を授業にのせていくことも必要になります。

本稿では日本語と異なる英音とその発声法を取り上げ、生徒がその違いを理解し練習する授業を提案しました。具体的には授業実践に基づいて、日本語にない英音の子音 p, f, th, r, l, w を選び、これらの音声の出し方を、口の動きに焦点を当てながら列挙しました。同時に、英語を話すときには日本語よりも息を出すこと、つまり、気息音(aspiration)や英語独特のリズムの重要性も力説しました。

最後に、英語学習に関して日本人固有の文化的な問題があります。日本の高校生は、筆者がかつて教えたアメリカの公立高校の生徒たちと比較しても、自己主張が極めて弱いという点です。何か伝えたい願望や内容がなければ自己主張が成り立ちません。これは英語以前の問題ですが、英語教師はこの文化的な傾向を踏まえて使える英語教育に取り組む必要があると考えます。

(兵庫県立伊川谷高等学校 嘱託講師)